



Vol.36

テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で分析・解明し、解決策を論理的に構築する、ITL独自の学びに迫ります。

はじめに

私は国際情報学部で松野良一先生のゼミに所属し、ジャーナリズムを学んでいます。昔から映画やテレビが好きで、とにかく自分の手で映像作品を作りたいという思いで大学生活を過ごしてきました。そんな中、映像について学び、自分で企画から撮影、編集まで行えるという活動内容にひかれ、このゼミを選択しました。



日本航空123便墜落事故 — 40年目の現場を歩いて

国際情報学部国際情報学科4年
群馬県立渋川高等学校出身

瀬川 藍生

大学3年次から、日本航空123便墜落事故現場の取材企画に取り組んでいます。テーマの選定理由は2つあります。1つ目は、映画『クライマーズ・ハイ』を見たことです。授業中に教授から「群馬県民なら『クライマーズ・ハイ』を知っていますか?」と言われたことがきっかけとなりました。軽い気持ちで見始めたはずが、気づけば夢中で見ていました。2つ目は、この事故が私の地元である群馬県で起きたということです。実は教授に教えていただくまでの事故についてほとんど知りませんでした。しかし、映画を見て事故の概要を調べたことで、自分が生まれ育った群馬県で起きたこの事故の全容を知りました。その舞台裏にはどんな事情、物語があるのだろうかという興味を持ち、取材企画を進めようという決心しました。

飛行機後部にある圧力隔壁（機内と機外を隔てるもの）が破損すると同時に尾翼の大部分が吹き飛ばされ、同機は操縦不能に陥り、群馬県多野郡上野村の高天原山の尾根（通称、御巢鷹山）に墜落しました。2025年でこの事故は40年目を迎えています。

これまでの調査活動

私は始めに、地元群馬県の事故現場である御巢鷹山に訪れました。実家から車で約2時間半の道のりで、登山道は車1台しか通れないような道幅。初めての取材先である事故現場で、自分の足で歩いたからこそわかる、画面越しには伝わってこない山の急峻さに驚きました。また、多くの墓標を目の当たりにしたからこそ、大勢の命が奪われたことも実感しました。さらに、山で話しかけてくださった記者が中大の卒業生で、この後、私の活動にさまざまな助言や手助けをしてくださることとなる貴重な方との出会いにも恵まれました。

した。机上での情報収集はもちろんだ切ですが、実際に現場に足を運び、自分の肌で感じ、つながりを作る重要性を学びました。

ほかにも、藤岡市で行われた遺族の方の講演会に参加させていただきました。谷口真知子さん（77）は絵本『パパの柿の木』の著者であり、事故で夫の正勝さん（当時40歳）を亡くされた方です。谷口さんは、絵本に込めた思いとともに、事故当時に対応に当たった群馬県藤岡市の方々への感謝を述べられていました。講演後、オンラインで取材をさせていただく約束をいたしました。後日実施したオンライン取材では、事故当時の状況、正勝さんが残した遺書、日本航空の対応などについて2時間ほどお話を伺いました。正勝さんが機内で残した「まち子 子供 よろし



群馬県御巢鷹山 スゲノ沢



御巢鷹山慰霊碑の昇魂之碑

く「谷口正勝」という遺書の約束を守りたいという思いから、真知子さんは子ども2人を守るべく宅地建物取引士の資格を取得し、アパート経営を始めたり、事故についても署名活動を行ったりと、事故後の人生を精一杯生きてきたことを知ることができました。

谷口さんは、「明日も明後日も同じ日が来るとは限らない、日常の大切さ。そして辛い目に遭っても前を向いて歩いていけば、また新しい幸せがやってくる。絵本に込めたことを、今後も体力が許す限り伝えていきたい」と取材の最後に教えていただきました。

東京都ではJALメインテナンスセンター1ビル内にある安全啓発センターなどを訪れ、日本航空の安全の在り方について社員の方にお話を伺いました。安全啓発センターは事故の教訓を風化させてはならないという思いから、安全運航の重要性を再認識する場として設立され、研修では社員全員が訪れることになっているといいます。

さらに、群馬県上野村で開催されている灯籠流しにも参加し、遺族の方、関係者、ほかの参加者に広く取材をす

ることができました。イベントに参加した経緯から、その方の今日までの生活や安全への思いなどを知ることができ、貴重な経験となりました。

どこに行くにも勇気が必要で、誰かに話しかけるだけでも毎回緊張しました。しかし、自分から行動しないとチャンスは掴めないし何も変わらないのだと、この活動を通して知りました。以降は、積極的に行動し続けています。

伝えていきたいこと

私は現場に足を運び、関係者にインタビューを行う活動をとおして、事故の記憶をつなごうとする人々と、安全運航への努力を続ける人々の姿を明らかにしたいと考えています。また、事故で大切な人を失った遺族が、その後のように生きてきたのか、悲しみやトラウマと向き合いながらも再起し、社会とかかわり歩んできた人生について記録し、発信していきたいです。

「前を向いていけば、また新しい幸せがやってくる」。谷口さんは、常にこう言い続けています。しかし、この言葉を実現するのはそう簡単なことで

はないと思います。だからこそ谷口さんの活動を記録し、多くの人に知ってもらうことは、多方面にプラスの影響を与えると確信しています。

私は、歴史に残る日本航空123便墜落事故の現場を歩くことで、多くのことを学んだように思います。事故の概要、現場のすさまじさ、現場の自治

体や救助隊、関係者の悲しみ、航空会社の組織改善、遺族たちのトラウマとその後生活、そして、生きるということ、幸せとはなにかということ。大正時代に、「日本航空123便墜落事故の現場を歩く」ことで学んだものは、今後の人生における、大きな教訓になると信じています。



谷口真知子さんと筆者



JAL メインテナンスセンター1ビル



灯籠に書かれたメッセージ